

はじめの顔 利根川 裕

あれは、もう十年近くも前のことになるろうか。

当時、雑誌編集者だった私の、はじめの女優インタビューの仕事は、山本富士子であった。そのころの映画界は、興行的には最盛期で、それだけに、結婚前の「日本一の美女」スターのインタビューは、のちの皇太子妃の取材ほどにも骨の折れるものであった。かなり忍耐のいる下交渉を重ねた結果の、やっとの取材許可であった。それに、こちらも駆けだし記者だったから、いよいよ彼女の前に立ったときは、身体が小刻みにふるえ、メモをとる字がかたちにならなかったのを、いまでもよく覚えていてる。

砧撮影所のすぐ近くの、ある衣裳合わせの場所へ来るように、と指定されていた。スク

リーンやグラビア写真をとおして、むろん山本富士子をよく知っていたが、肉眼で素顔を見るのは、それがはじめてであった。梅雨どきで、汗が肌になべりつくころのせいか、彼女はごくシンプルなワンピース姿であった。そして私は、緊張のあまりオドオドしながらも、これが麗名高い山本富士子なのか、という戸惑いを感じていた。眼前にいるのは、いやに顔の造作の大きい、小太りのただのねえちゃんなのである。私の美意識からすれば、当時私が惚れていた一女性にも及ばない程度だったのである。

もっとも、山本富士子さんのために、つけ加えておかなければならない。その後、ある座談会で、志賀直哉氏と彼女が対談したことがある。その席に、私もそばでちんまり坐っ

ていたのであるが、和服で正装した彼女に出会ったときは、あっと声をのむほど美しかった。美しい以上に、ふくよかな一種の品格をそなえていて、それが一流料亭の一番贅をこらした座敷の、あらゆる美術品を庄するほどの力があった。私は、自分の一人合点だが、「この前は、失礼しました」と懇懇に挨拶した。彼女は艶然と笑いながら、

「あら、以前どこかでお会いしましたかしら」とこともなげに受け流した。俳優の素顔をはじめてみて、奇妙な感慨をもった経験としては、滝沢修がある。これはもう二十年近くも前のことになる。ある劇団の会合の席上で出会ったのであるが、すでにそのころ、前頭部のすっかりはげ上っていた中年男の顔を見て、若年の私はすっかりうろたえてしまった。そのすぐ前、帝劇で、シラーの「たくみと悪」で若きプリンスになって私を魅了した滝沢修のイメージが、あまりにも強く残っていたためかもしれない。素顔の名優は、ひどくグロテスクなものに思えて仕方なかった。舞台上で見たみずみずしいプリンスと、ジャンパー姿の中年のおじさまとは、

私の映像のなかでは、なかなか一致しなかった。数年のちになって、滝沢修の扮するヴィンセント・ゴッホを見て、そのときはじめ、私のなかでは素顔の滝沢修と舞台の滝沢修が、まさしく一人の人間であることが、ようやく納得できたのであった。

この種の体験で、私が一番ショックを受けたのは、数年前亡くなった市川団十郎である。はじらいをかなぐり捨てて正直に言えば、私の団十郎への入れあげかたは熱狂に近いもので、いまもって、私が生涯のうちで、真実惚れこみえたと自信をもって言いきれぬのは、団十郎ただ一人である。惚れていたのは、むしろ舞台の上の彼である。惚れすぎた弱味で素顔の彼に合う機会は何度もあったのに、私のほうから逃げまわっていた。

それが、いきなり東横ホールで、素顔の団十郎——当時海老蔵——と出合わってしまったのである。そのときの彼は、自分の出ていない芝居を見に来た「お客」だったのだが、一般のお客同様、幕間になると廊下へ出て、柱のかげの、一番人目につかないソファにこっそりと腰をおろした。たまたまその隣り

に私がいたのである。とりたてて言うほどでもないことを、二、三言かわしただけの、ほんの短時間ではあったが、私はすっかり逆上してしまっていた。惚れきった人間に出合ったという興奮もあった。しかしそれ以上に、素顔の彼が、あまりにも舞台姿と絶縁したものであったのに驚いていたのである。与三郎や実盛や光源氏となって一世を風靡した美男俳優が、じつはそれほど「いい男」ではなかった、というような俗な違和感なのではない。舞台上の人物と現実生活上の人物とは、はつきり異質な人間だったのである。

その後になって、私はほとんどすべての俳優の素顔を知ったが、彼の兄弟である幸四郎や松緑にしても、また女形である歌右衛門にしても、彼らの舞台上の人物と素顔の人物とは、それなりの連続性をもっている。しかし団十郎にかぎって、舞台上の彼と素顔の彼は、まったくべつな人間なのである。そして私は、そのことを非常に大切なことであると思っている。虚構と事実ということは、あらゆる芸術分野の、もっとも原理的な難問であるが、団十郎という人が私に与えた衝撃は、

その一つの重要な解明のあかしのように、私は思っている。

やや独断ふうにならば、素顔と舞台姿とが断絶していてこそ、俳優なのである。団十郎の技芸については、疑問を保留する人はすくなくないが、私はその断絶のゆえにこそ、彼を一級俳優と断じてはばからない。言いかたをかえれば、それが私の芸術観だということでもある。

蛇足をつけ加える。その後、私は素顔の団十郎にはしばしば会った。楽屋でも会ったし、上目黒の自宅へも訪ねた。そして、素顔の団十郎は、またまた私を惚れさせてしまうのであるが、その惚れかたと、舞台上の彼への惚れかたととは、これまたまったく異質のものであった。

青山斎場での団十郎の葬儀の日、私に虚構というものを信じこませた人のために、私はほんとうに涙を流した。葬儀は、十一月の、落葉があわただしく枝離れるころであった。